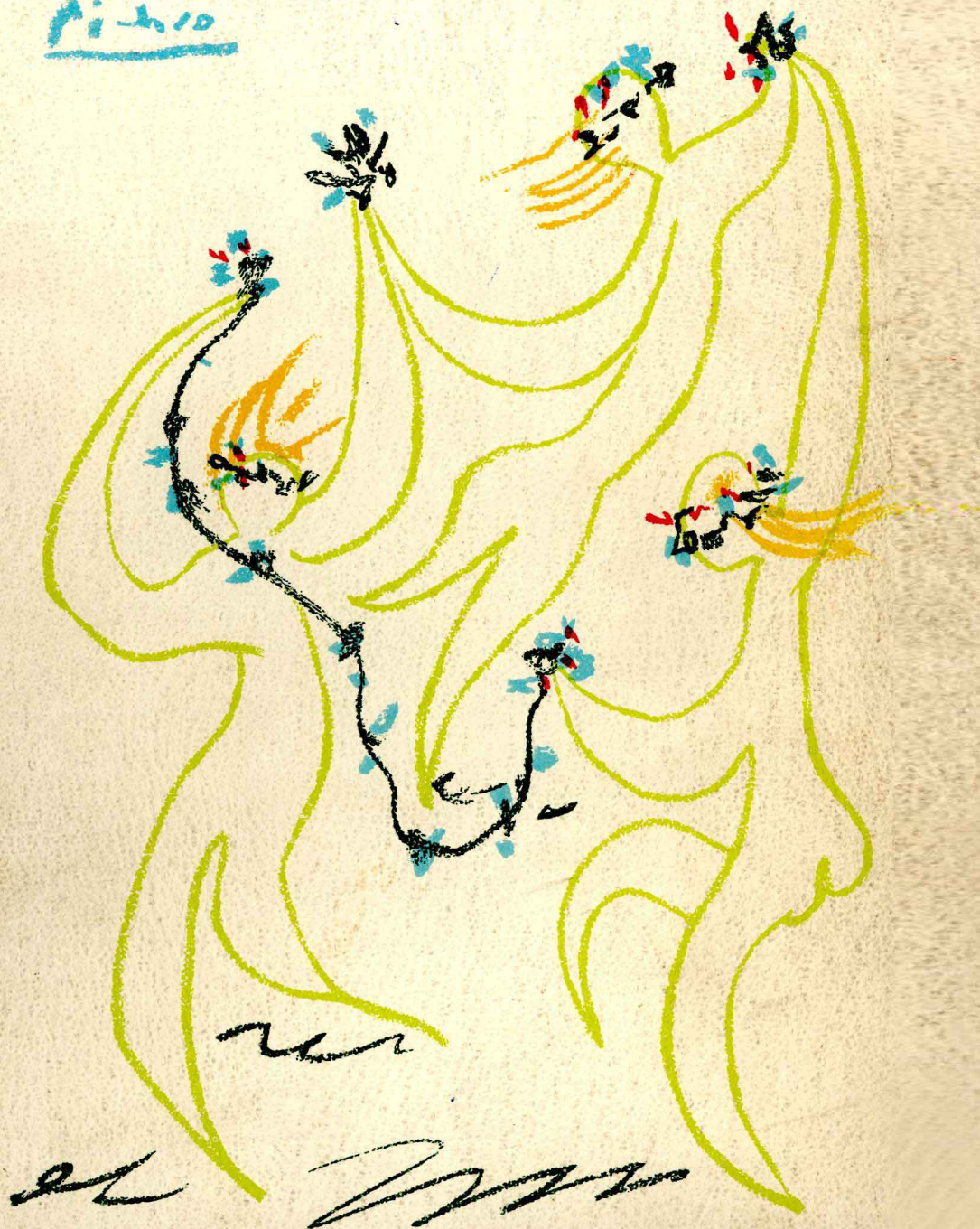


Pi-110



ノーベル賞 文学全集

NOBEL PRIZED
LITERATURE

主婦の友社

ノーベル賞文学全集 20

イエイツ
ショー
オニール

訳者 尾島庄太郎
高松 雄一
出 渕 博
福田 恆存
松 原 正
倉 橋 健
菅 泰男
水之江有一
戸 張 規子
佐 野 雅彦
臼 井 善隆

授与演説および受賞演説の収録に際し
ては、集英社のご厚意を得ました。

昭和47年4月5日 発 行

発 行 者／石 川 数 雄

発 行 所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台 1-6

郵便番号 101

振 替 東京180番

電 話 東京294-1111(大代表)

印 刷 所／凸版印刷株式会社

製 本 所／寿製本株式会社

大口製本印刷株式会社

本文用紙／本州製紙株式会社

表 紙／日本クロス工業株式会社
ク ロ ス

製 函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社 1972 Printed in Japan

0397-522203-3062

目次

イ エ イ ツ

選考経過……グンナー・アールストレーム……………	出淵 博訳……………6
授与演説……ペール・ハルストレーム……………	水之江有一訳……………9
受賞演説……………	水之江有一訳……………12

受賞記念講演 アイルランドの演劇運動……………	高松雄一訳……………13
----------------------------	--------------

詩抄……………	尾島庄太郎訳……………21
---------	---------------

薔薇 24	葦間の風 35	七つの森の中で 43	緑の兜、マイク
その他の詩 47	責任 47	クール湖の白鳥 48	
ル・ロバーツと舞姫 50	塔 57	最後の詩集 79	

戯曲……………	高松雄一 出淵 博訳……………87
---------	----------------------

死者の夢 89	窓ガラスに刻まれた言葉 97	煉獄 109
クローリンの死 114		

人と作品……フランク・カーモウド……………	出淵 博訳……………121
著作目録……………	出淵 博編……………442

バーナード・ショー

選考経過……グンナー・アールストレーム……………戸張規子訳……………142
授与演説……ペール・ハルストレーム……………佐野雅彦訳……………146

聖女ジャンヌ・ダーク

人と作品……アイバー・ブラウン……………福田恆存訳……………151
著作目録……………松原正訳……………151
……………戸張規子訳……………255
……………佐野雅彦編……………450

オニール

選考経過……シュル・ストレムベリイ……………白井善隆訳……………268
授与演説……ペール・ハルストレーム……………倉橋健訳……………271
受賞演説……………倉橋健訳……………275

喪服の似合うエレクトラ 三部作……………菅 泰男訳……………277
毛猿……………倉橋健訳……………391

人と作品

人と作品……ジョン・ガスナー……………白井善隆訳……………425
ギリシア悲劇とオニール劇のエレクトラ……菅 泰男……………436
著作目録……………倉橋健編……………454
……………白井善隆編……………454

肖像画／ミッシェル・コーヴェ……………4、140、140、140、
カラーさしえ／キーオウ（イエイツの作品）……………104、105、266
ロドルフォ・デル・カステイヨ（ショーの作品）……………184、185、200、201、248、249
ジャン＝ドニ・マルクレス（オニールの作品）……………392、393、408、409

ウィリアム・バトラー・イエイツ

一九二三年受賞（五十八歳）
（アイルランド 一八六五～一九三九）

詩抄

薔薇 葦間の風 七つの森の中で 緑の兜、
その他の詩 責任 クール湖の白鳥 マイク
ル・ロバーツと舞姫 塔 最後の詩集

戯曲

死者の夢 窓ガラスに刻まれた言葉
煉獄 クーフリーンの死



W B Yeats,

イェイツ

選
考
經
過

授
与
演
說

受
賞
演
說

W・B・イェイツに対する

ノーベル文学賞授与の選考経過

スウェーデン海外文化振興協会

グンナー・アールストレーム

長い間イギリスは、ノーベル賞関係者たちに解決すべき問題をつきつけていた。スウェーデン・アカデミーは、当初、形にはまった理想主義のゆえに、シェイクスピアとディケンズとサッカレーの国を無視していたために、気まぐれだという非難を受けたのである。一九〇八年のラドヤード・キプリングへの授賞という性急で意外な決定に至って、この賞はついに威信を失い、この賞の外国文学に対する明確な評価について鼎の軽重を問われることになってしまった。ドイツからはすでに四人の文学賞受賞者を出していたし、フランスからは三人の受賞者を出していた。第一次大戦後、イギリス愛好家たちがスウェーデンで勢力を挽回するに及んで、この不均衡は注意を惹いた。そして、これを是正する気運が熟したのである。

その頃、トーマス・ハーディの名がとりわけ注目を浴び、スウェーデンのジャーナリストたちの間に、多くの支持者を集めていた。人びとは、この文壇の最高峰が、全世界から熱望されている賞を得る完全な資格者であることを明白な真理として受けとっていたし、イギリスの有力者たちによって彼が数度にわたって受賞候補にあげられていたことも誰ひとり知らぬもののない事実である。悲劇的な小説の巨匠として名声のあったハーディは、晩年になって、散文家としての月桂冠に、比類ない完璧さをそなえた詩によって、抒情詩の小枝をもつけ加えたのだ。本国においては当然、オリュンポスの神の特権を享受し

ていた。彼こそは疑いようもなく、イギリス文学の第一人者であった。

だから、一九二三年度ノーベル文学賞は、当然『ダーバーウィル家のテス』と『日蔭者シェード』の作者の手に渡るものと人びとは期待していた。考えられる有力な対立候補としては、トーマス・マンやシグリー・ウンセツト、ジョン・ゴールズワージーの名があがっていたが、いずれにせよ、イギリスがこの年の賞を獲得することは明らかだとされていた。というのは、スウェーデンの皇太子が、イギリス王室のご親戚と結婚することになっており、スウェーデン文化界の好意のしるしである文学賞は、婚約者へのじつに時宜を得た花束として捧げられるであろうからだ。したがって、ノーベル賞の花束がロンドンではなく、アイルランドのダブリンに贈られたことを知ったときの、人びとの驚きが大きかったことは言うまでもない。

「イギリス嫌いは消えたわけではないのだ」と、ある自由主義系のジャーナリストは感想をのべた。「そして、ついに西に向かうことが避けられないとなると、さいはての辺境の地に向かったのである。」そして、その批評家は、さらにつけ加えている。この選考は政治的な悪い後味を残した。というのは、当時イギリスとアイルランドの間にあった緊張関係を考慮に入れると、スウェーデン・アカデミーの決定は、その一方に左袒することだし、「エール自由国」を支持する姿勢を明らかにすることと受けとられかねないからである。その他にも、新聞の海外政治欄を読んで、そこにはつきりしているケルト的な色調に反感を感じるものもいた。それに加えて、当のW・B・イェイツが一般読者層には知られていないという事情がある。この星の光は北方の人びとの肉眼には届いていなかったのだ。イギリスにも口惜しさに歯ざしりをするものがいたが、とくに不満が発せられたのは、ノーベル賞選考委員たちが、イェイツの価値をまるきり論じもしないで、ハーディを棚上げしてしまったという事実のせいである。『オブザーヴァー』紙の著名な批評家J・C・スクワイアはこの間の事情を公平にみごとに判断している。

「おまけにノーベル賞の国では、いろいろと研究し、さまざまな作品

の記録を照合したり、出版物にざっと目を通したりしたあげく、詩を翻訳し、クリスマスのずっと以前に、スウェーデン語訳の戯曲選集を出版した。これらの事実はすべて、これまでほとんど未知だったが、重要で独創的な作家、その上、古い魅惑の島の新しい文学の代表者である作家に、このたびこの名誉ある賞が授与されたのだという印象を強めるのに役立った。」

不謹慎な視線からノーベル賞の秘密を隔てる厚い緞帳^{じゆんちやう}をあげうる立場にある消息通は、その決定が一般に信じられているように、気まぐれの結果によるものではないことを知っていた。じじつ、これは長い歳月にわたって準備されてきたものだったのである。W・B・イエイツについての記録が敬虔な手つきで集められはじめたのは、一九〇二年のことだった。これはテオドル・モムゼンが受賞した年にあたるが、この年に、イエイツは、同国人であり、はるかに年長の自由主義的な歴史家、W・E・H・レッキーによって名をあげられた。レッキーは、その主著『十八世紀イギリス史』がフランスでもよく読まれた学者で、一八九五年にダブリン大学の特別研究員に選ばれ、一九〇三年に急死するまでその席にあった。彼の紹介が役買って、全若くて、未知数だが、しかし驚くべき才能の持主である、アイルランドの詩人W・B・イエイツに外国人の注目を集めさせたことはたしかである。

「わたしは、彼が現存する詩人のなかで、もっとも偉大だと言うつもりはないし、また、もっとも人気があると言うつもりもない。しかし、彼ほど、まぎれもない詩的な才能と同時に、あなたがたが求めている理想主義的な傾向を併せもっていて、現代イギリス文壇に、こうした傾向を盛んにするのに貢献した詩人はいない。」

歳月が過ぎ、若い未知数の詩人はついに確固とした名声の座を占めた。一九一二年、タゴールをヨーロッパの一般読者に紹介したのをきっかけに、イエイツは、ノーベル賞の行事の軌道のなかに入ってきたのである。そして一九一四年、王立文学協会のG・M・ブランケットの推薦によって、彼自身が候補にのぼるようになったが、イエイツの名前が大戦後、候補者リストに加えられたのは、ノーベル賞委員会

自主的判断にもとづくものだ。委員長のペール・ハルストレーム博士はイエイツの熱烈な讃美者だった。彼はトーマス・ハーディをいかがわしい決定論主義者だと看做していたのに対して、イエイツは、彼の理想主義的な好尚にかなっていた。ついでに言うならば、こうした理想主義的な傾向をもつ候補者は、選考委員たちのうちの主流の人びとの共感を得る機会が大きい。

今世紀に入ってから、スウェーデン文学は、ストリンドベリや自然主義のあとをうけて、地方主義への一種の傾きをもっていた。セルマ・ラーゲルレーヴ、ヴェルネル・フォン・ヘイデンスタム、エリク・アクセル・カール・フェルトの名をあげるだけでも思い半ばにすぎよう。産業革命によって崩壊させられた古い田園地方は、俗世に別れを告げ、その昔の、^いかめしい^う地方^が色^がゆたかな思い出の物語のなかで牧歌的な魅力^を甦^をらせる文学をつくり出したのだ。こうした一群の作家たちは年老い、いかめしいアカデミーのなかに席を占めた。その代表の一人がペール・ハルストレームである。やや甘い人生観の枠組のなかで、この第二のC・D・アヴ・ヴィルセン博士は、十九世紀に対して穏和ながら怒りを抱いていた。そして、彼は機会を逃さず、彼の反知性主義的な共感を身につけている作家たちを支援した。

イエイツこそこの図式にまさにぴったりの詩人のように思われた。そして、『キャスリーン・ニ・フリーハン』の作者は、数多くの紹介の論文の材料を提供し、ついに、その充分な努力が十二月十日、栄冠をかちえたとき、その精粹は受賞演説のなかに完全に開花することになる。ここからいくつもの奇妙な推理が生まれる。こうして、戦後の混乱は、懷疑主義と科学思想の破産とに帰せられるが、その見方のグロテスクさはかなり衝撃的である。また同様に驚くべきことは、イエイツがドルイド僧と感傷的な村の詩人の中間に位置する、一本調子の素朴な神秘主義者という特徴のもとの紹介されたことである。しかも、誰も、この受賞詩人が修業時代にバリやロンドンの象徴派詩人たちの間で過ごした年月があることなどにはほとんど考えが及ばなかった。ところがこの経験こそ、彼が幻想や新しい表現方法を追求するために身をまかせた経験、つまり彼の時代の知的なヨーロッパへの愛着

ともいべきものであり、その雰囲気のなかで彼は、友人のエズラ・パウンドやT・S・エリオットと共に現代詩のスタイルを生み出したのだ。

イエイツが一九二三年度のスウェーデン・アカデミーのノーベル賞候補者リストにくみ入れられるためには、民間伝承的な詩人、ケルト的薄明の俗人（*folk*）というかなり地方的で素朴な次元にまで身を落とさなければならなかった。緑の島（*Green Island*）の友人たち——小妖精や地霊、仙女、侏儒などが、彼がアカデミーの門を開くのに大きな役割を演じたからだ。けれども、こうした保留をしたところで、十一月十四日の授賞決定を彼が喜ぶのが間違っているということにはならない。

一九二三年はイエイツにとって幸運な年であった。彼はあらたに上院議員になるよう説得され、エール自由国のために有益な仕事ができると感じていた。こうして市民としての名誉が、文学者としての栄光につけ加わることになったのである。この大きな出来事が起こったとき、議会はこの賞から生じる国際的な栄光の一部を手にする事ができた。「われわれは、イエイツ上院議員が、十二カ月前、きわめて危機的な状況のなかで、人民に味方をした勇氣と愛国心のことを思うとき、ますます誇らしく感じる」と、グレナヴィ卿は明言した。ストックホルムからの吉報を受けとった翌日、受賞詩人は、友人たちをシェルボーン・ホテルの晩餐に招いた。このホテルはダブリンの生活の匂いにみちていた。最初に到着した祝電がとくに彼を喜ばせた。それにはジェイムズ・ジョイスの署名があったからだ。

ついで詩人は、夫人を伴って遠方の地ストックホルムへと旅立った。この地で、一週間、記者会見だの、写真撮影だのがあり、その間を縫って、ノーベル賞授賞式祝典、宴会、宮殿での晩餐会、『キヤスリーン・ニ・フーリハン』の上演といくつかの会議がおごそかに行なわれた。イエイツは愛想よく、しかも素朴な、完璧な紳士としてふるまい、全出席者から好意をもって遇された。やがて、イエイツは、王室の人びとが、彼をこれまで王室に招いたノーベル賞受賞者のうちでもっともへ上流の人士とみとめてくれたことを知り、大いに満足し、それを

つつみかくそうともししていない。

イエイツが晩年に書いたすぐれた詩から生じる孤高（*solitary*）な魅力にくらべると、こうした類（*kind*）の人氣を氣にする行為はまったく空しいように思われる。けれども、われわれは、それを無視することはできない。というのは、北方の民族の勝利に酔った日々につづく出来事への主賓の反響を極端な形で知らされるからだ。アイルランドに帰ると、彼は多額の賞金を実用的なものに使うのにはどうしても満足できなかった。しかるべき投資、病妹への援助、『大英百科事典』とギボンの全集、蔵書のための書棚と、絨毯購入などである。感謝の気持ちにみち溢れて、彼はペンをとり、ノーベル賞の国スウェーデンのために、彼の旅行中の印象記を書きしるした。

その結果できたのが『スウェーデンの寛大さ』という題の文章であるが、これは、最初一九二四年の『ロンドン・マーキュリー』に発表され、やがて単行本になり、最後には、死後出版の『自叙伝』のなかにくみ入れられた。微笑をたたえているような口調で書かれた日録ふうのもので、そこには重要なものと、そうでないものとがまじり合い、きわめて優雅な小品となっている。そのなかの白眉は、授賞式での講演だが、イエイツは主題として『アイルランドの演劇運動』をえらんでいる。

彼が自ら説明するところによると、彼はもとの自分へと一種の本卦（*hexagram*）還りをしたのであり、そこでは、バリ滞在中の友人ジョン・ミリングトン・シングや、ダブリン演劇界のよき守護妖精グレゴリー夫人が力強い調子で回想されている。「国王陛下の御手から私が貴国アカデミーの名誉ある賞を頂いたとき、私は自分の片側には若い男の亡霊が、片側には老齡のなかで力萎えつつも生きつづけている婦人が立っているにちがいないと感じたのです。」こうした回想は、一九二三年の式典のための挨拶の文章にさえケルトふうの詩の光を投げかけているが、その当の講演者に、「もっとも真摯な芸術的な形式のもので、民族の魂に語らしめた、つねに昂揚した靈感にみちた作品のゆえに」賞が授与されたのである。

（出淵 博訳）

W・B・イエイツに対する

ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任理事

ペール・ハルストレーム

一九二三年十二月十日

陸下
閣下
淑女
紳士各位

ウィリアム・バトラー・イエイツは、青春の花がほころび始めたまさに当初から、詩人として、その名にまぎれもない権利をもつて現われました。彼の自伝によれば、まだほんの少年にすぎなかったころすでに内なる詩人の衝動によって自己と外界との関係は決定されたということなのです。まさに当初より、彼は感情と知性の生命が指し示す方向に向かって、有機的な成長をとげてきたのです。

彼は芸術的な家庭に——ダブリンで——生まれました。こうして、美はおのずから彼にとって大切で欠かせないものとなりました。彼は芸術的才能をあらわし、この性向を満足させることに教育は向けられました。伝統的な学校教育をうけさせる努力はほとんどはらわれませんでした。彼は第二の祖国イギリスで大部分の教育を受けました。それにもかかわらず、彼の決定的な成長はアイルランドに、とりわけ、彼の一家が夏をすごしていたコナハットの、まだケルト的なものが比較的に残っている地方に、結びついていました。この土地で彼は民間信仰と民間説話の中に伝えられ、民族のもっとも顕著な特

色である想像的神秘主義にふれて、山と海の原始的な自然のなかで、その魂をとらえようと情熱的な努力を傾けるようになりました。

自然の魂は彼にとって決して空虚な語句ではなかったのです。現象界の背後に生命のある人間の能力が存在するという信仰を、この民族の大部分の者がその頃まで持ち続けており、このケルト的汎神論がイエイツの想像をとらえ、彼の生得の強い宗教的欲求をみたしてくれました。彼が自然の生命を熱心に観察しようと当時の科学精神にもっとも親しんだ時には、夜明けに鳴くさまざまの小鳥の調べや、夕暮れの星がきらめくときにあらわれる蛾の飛翔などに、もちまえの熱意をそそいだのでした。この少年は太陽日の律動にとでもくわしくなり、このような自然の兆候をもとに、時刻をきわめて正確にきめることができるようになりました。朝や夜に聞こえる物音との、こうした親しい交わりは、のちに彼の詩にもっとも魅惑的な多くの特色を形成しました。

彼は成長するとすぐに、もっとも強く心ひかれた詩に専念しようとして、美術の勉強を断念しました。しかしこの勉強の影響は、形式や個性的な文体を重んじる彼の強烈さと同時に、さらにそれ以上に、個性の命ずるものを鋭敏ではあるが断片的な彼の哲学的思索が模索する時にみられるあの逆説的で大胆な問題の解決とに、彼の生涯にわたって顕著にみられるものです。

一八八〇年代の終わりにロンドンに居を定めた時、彼の入った文学界は彼に多くのものを提供したとは言えませんが、文学界に反対する友人を少なくとも提供してくれました。このことは血気さかんな若者にとって、特に貴重なことと思われれます。当時の文学界は、その直前まで支配的であった時代精神、すなわち独断的な自然科学と自然主義芸術の精神に対する倦怠と逆反でみちあふれていました。あのとおり、全く直覚的で、幻想的な、しかも不撓不屈の精神をもったイエイツほど、深く根ざした敵意をいだいた人はほかにほとんどいませんでした。

彼は自然科学の強いうぬぼれや現実を猿まねする芸術の偏狭さによって心をかき乱されただけではありません。さらに彼は個性の分裂と懷疑から生じる不感症によって、また夢の樂園の神聖な国土へ集團的にまた自動的に進歩することだけをせいぜい信じる世界の中で想像力

と情緒的な生命の枯渇によって、彼は恐怖をかきたてられたのです。彼の驚くべき正当さは事実によって証明されております。そのような訓練の結果人間性が到達しうる『樂園』を享樂することについて、今日のわれわれは疑いをさしはさむ利点をもっております。

とてももてはやされた詩人ウィリアム・モリスに代表されるような、はるかに美的なユートピア的社会改良案も、若いイェイツのような個人主義者の心をとらえなかったのです。やがて彼は民衆の方へ向かう道を選びました。それも抽象的な概念としての民衆ではなく、彼が子供の時に親しんだアイルランドの民衆の方へ向かいました。民衆の中に彼が求めたものといえば、現時の要求に心うごかされる一般大衆ではなく、歴史的に陶冶された魂であり、より一層の意識的生活へ目覚めさせたいと彼が念願するものでした。

ロンドンの知的不安の中にあつて、イェイツの心にとつてたいせつなものはアイルランドの国民的なものでした。この感情は夏に故国を訪れ、その伝説と風習をひろく研究することによって育はぐまれました。彼の初期の抒情詩はほとんどすべてこの時の印象にもとづいております。初期の詩がイギリスでただちに高い評価をかちえたのは、想像に強く訴えかけるというその新しい素材のもつ特異性による反面、一方では、なおイギリスの詩のもついくつもの高貴な伝統と密接に結びついている形式をとりいれていることによります。ケルト的なものとイギリス的なものとの融合は政治の領域では決して成功をもたらしませんでしたけれども、この詩的想像の世界では一つの現実となりました——これは精神的に少なからぬ意味をもつ一つの徴候と言えます。

イェイツがイギリスの巨匠たちの作品をどれほど多く読んでいたにせよ、彼の韻文は新しい性格をもっております。韻律と色調は、あたかも別の大気へ——海辺に感じるケルトの薄明の大気へ——移されたかのように、変化しました。現代のイギリス詩にふだんみられるよりも、もっと大きな歌の要素がみられます。調べはそれよりももの悲しく、韻律は奔放なものにもかかわらず、おだやかにまるで夢遊病者のおぼつかない足どりのように作用しており、風のゆるやかなそよぎと自然力の永遠の鼓動をもった全く別の韻律をわれわれに暗示してくれま

り、理解しようとするのは決して容易なことではありません。事実、それはしばしば難解なものとなり、理解するには努力を必要とするほどです。この難解さの一部には実際の主題のもつ神秘性にもよりますが、おそらく同程度の原因がケルト的気質にもあるものと思われま

す。この気質は明晰さよりもむしろ、熱情、優美、それに洞察などに特徴があるように思われます。しかし、時代の風潮が少なからぬ役割を演じたかもしれません。それはきわだってふざけい言葉を見出すうとする作業の際に、主に会得した象徵主義と「芸術のための芸術」の風潮であります。

時代の特色であつたあの美の探求の努力に多く付随して生じる不毛から、イェイツは民衆の生命と結びつくことによって救われました。彼を中心とした指導者として、ロンドンの文学界にいる同胞の間にケルト主義の復活と呼ばれ、またイギリス・アイルランド文学とも称すべき新しい国民文学を創造する、あの力強い運動が展開されました。

この仲間の主要なしかももつとも多才な詩人がイェイツだったので、人々を目覚めさせ、糾合する彼の個性は、分散していた力に共通の目的を与えることにより、あるいはこれまで自らの存在を意識していなかった新しい力を勇気づけることによって、この運動をきわめて急速に発展させ開花させました。

時を同じくしてアイルランド演劇が誕生したので、イェイツの積極的な宣伝活動が舞台と観客を創り出しました。しかもその初公演は彼の戯曲『キャスリーン伯爵夫人』(一八九二)だったので、驚くほど詩情の豊かなこの劇に続いて、主に古代の英雄伝説からとつたアイルランドの題材をもとに一連の詩劇が次々に書かれました。その中でももっとも美しい作品は、アイルランドのヘレネーを扱った宿命の悲劇『デアドラ』(一九〇七)、きわだつて原始的荒涼さをもった陽気な英雄神話『緑の兜』(一九一〇)とか、『王の闘』(一九〇四)などです。とりわけ『王の闘』は素朴な題材の中にも雄大で深淵な思想が浸透している作品であります。王の宮廷における詩人の地位と身分についての争いがここでは、われわれの世界で精神的なものがいかに有効であるべきか、また精神的なものがうけとられるのは真実の信念をもつてなのか、それとも誤った信念をもつてなのかという、いつも論争のま

張と同じものを、人間の生命を美しく価値あるものにするあらゆるものを、詩の優越性を説く中で彼は弁護しています。このような主張をおしすすめることはすべての詩人にとって可能なことではありません。しかし、イエイツにとってはそれが可能だったのです。彼の理想主義は決して衰えることなく、また彼の芸術のもつ厳しさも失われることはありませんでした。これらの劇作品の中で、彼の韻文はまれにみる文体の美しさとゆるぎなさをかちえました。

しかしながら、もつとも魅力的なものは『憧れの国』(一八九四)にみられる彼の芸術であり、明瞭ながらもいわば夢のような調べの中に幻想的な詩の魔術や春のさわやかさのすべてを兼ねそなえていることです。演劇的にもまた、この作品は彼の最上のものの部類に属します。もつとも素朴な民話劇でありまたもつとも古典的に完成された作品でもある短い散文劇『キャスリーン・ニ・フリーハン』(一九〇二)が書かれなかったならば、これは彼の詩の華とも呼ばれたことでしょう。

『キャスリーン・ニ・フリーハン』の中で彼は、ほかのどの作品におけるよりも力強く、愛国的な弦をかきならしています。その主題は長い年月にわたって自由を求めてきたアイルランドの闘争であり、主要な登場人物はさまい歩く乞食女として擬人化されたアイルランドそのものののであります。しかし、単純な憎悪の響きはわれわれの耳には聞こえてきません。またこの作品のもつ深い哀感とはこれと比較されるほかのどの詩にもまして控え目なものです。ただわれわれは国民感情のもつとも純粹でもつとも高貴な部分を耳にするのみなのです。言葉は非常に少なく、筋も可能なかぎり簡潔です。全体は虚飾をかなぐり捨てた偉大なのです。夢の中でイエイツを訪れたその主題は、天上からの賜物という幻想的な特色をとめております——しかしこれはイエイツの審美的な哲学にとつて無縁な着想ではありません。

イエイツの作品についてはさらに多くのことが語れましょう。しかし、彼の最近の劇がたどった方向を述べれば、それで十分なものと思われまします。それらはしばしば奇異なしかも未知の素材のためにロマンティックな劇であります。概して古典的に素朴な形式を追求しています。ここにみる古典主義は徐々に大胆な擬古主義へと発展してゆきました。詩人はあらゆる演劇芸術の起源にみられる原始的な柔軟性を得ようと努めてきました。彼は非常に激しくまた鋭敏な思考で近代の

舞台から自己を解き放とうと努めます。そこには想像によって呼びおこされる画像をかきみだす背景とか、フットライトによって必然的に誇張される登場人物の演技とか、写実的幻影を求める観客の要求があったのです。イエイツは、いわば詩人の幻想の中に生まれた詩をそのまま舞台にのせることを願っております。彼はギリシアや日本の様式に従って、この幻想に形式を与えたのです。こうして彼は仮面の使用を復活させ、素朴な音楽にあわせる役者の演技のために、大きな余地を見出しました。

このようにして簡素化され、様式の厳しく統一された作品においても、相変わらずその主題はアイルランドの英雄伝説から好んでとられております。高度に圧縮された会話の中に、また同時にその深い抒情的調べをもったクロスの中に、単にこれを読む読者にとつてすら、ときとして魅惑的な効果をもたしめております。しかしながら、すべてまだ成長期にあり、払われた犠牲がその成果によって十分につぐなわれたかどうかを決めるのはまだできかねることなのです。これらの作品はそれ自体非常に注目し値しますが、人気を博するという点においては、初期の作品にまさるのはおそらく困難なことでありましょう。

彼のもつとも明晰で、しかももつとも美しい抒情詩の場合と同じように、これらの戯曲において、イエイツは今までの詩人もほとんど達成できなかったことをやりとげています。それは彼がもつとも貴族的な芸術作法をかげながら、一方で民衆とたえず接触を保つことに成功した点であります。詩の作品は、多くの危険をはらんでいる排他的な芸術環境の中から生まれてきました。しかし彼はみずからのいだけ審美的信条のいかなる箇条をも永久に捨て去ることなく、燃えたつような彼の探究的個性はつねに理想をめざして、審美的空虚から自己を引きはなしておこうと努めてきました。彼は祖国の、なんびとかによって声をあたえられることを永い間待ち望んでいた国の、解説者たれと若い頃に命じられたその精神に、今従うことができたのです。そのような人の作品を偉大と呼んでも過言ではないと私には思われます。

(水之江有一訳)

受賞演説

私はこれまで作家としての生涯を通じてスカンジナビア人の国民に恩恵をうけております。まだ若い頃に私は、友人といっしょに、イギリスの詩人ブレイクの哲学の解説を初めて書くために数年をついやしました。ブレイクは最初あなたがたの偉大なスウェーデンボリの門弟として出発し、その後激しく反抗し、最後には彼になかば反抗しながらもなかば弟子でありました。友人と私は不明な章句を理解するために、たえずスウェーデンボリをひもとくことを余儀なくされました。ブレイクの神秘主義的な著述は常に突飛であり、逆説的であり、わかりにくいのです。しかし、ブレイクはここ四十年間のイギリスの想像的思考の上に、それ以前の四十年間にコウルリッジが与えたのにも匹敵する影響を与えてきました。ブレイクは詩のなかではもちろん、また時として絵画理論のなかで、スウェーデンボリの解説者でありあるいは敵対者だったのです。今度はスウェーデンボリ自身に対する興味から、私は最近彼に傾注しております。そして今度ストックホルムへの招待をいただいたとき、私が知識を求めたのはスウェーデンボリの伝記でした。またわれわれのアイランド演劇は、イブセンやビョルンソンの演劇がなければ生まれなかつたらうと私には思われます。こうして今あなたがたから私はこの偉大な榮譽を賜りました。三十年前に多くのアイランド作家がいろいろな会合で相会しては、自国の文学を情容赦なく批判し始めました。その文学を地方的偏狭さから解放することによって、自分たちの文学をヨーロッパで認めてもらえるかもしれない、というのが彼らの夢だったのです。私は彼らに多大の恩恵をこうむっておりますし、また数年後にわれわれの運動に加わった人々にはそれにもまさる恩恵をこうむっております。こうして、私がアイランドに帰るとき、今は私と同様に年老いてしまったこれら

の男女がこの偉大な榮譽のなかに、あの若き日の夢が実現されたことに気がつくことでしょう。私は心のなかで、もし彼らが存在しなければこの榮譽に私がどんなに値しないものであつたか、わかつております。

イエイツ氏の受賞演説に先立つて王立科学アカデミー総裁アイナル・レーンベリがこのアイランドの作家に祝辞を述べた。「イエイツ氏——私の言葉よりもっとみごとな言葉で、あなたの文学作品の概要はすでにわれわれに語られました。あなたがエメラルドの島から私どもに見せてくださいました美しい幻想にたいして、今ここで賞賛と感謝の言葉を述べることに何が私にできましょうか。私どもは、あなたが語ってくださいました妖精や小妖精の物語に、耳を傾けて楽しんでおります。銀色のますをうたった小さな詩に、私はとりわけ心をひかれました。ほかの詩のなかであなたはへ時は朽ちて消えゆく／燃えつきるろうそくのように」とうたっておられます。たしかにそのとおりです。しかし、きょうのこの日が必ずや永く私どもの記憶にとどまりますように、あなたの記憶のなかにいつまでもとどまりますならば、私どもも幸せであります。」

(水之江有一訳)

受賞記念講演

一九二三年十二月十五日

アイルランドの演劇運動

わたしがアイルランドの演劇運動を講演の主題としたのは、わたしにあたえられた大きな榮譽を思うとき多くの有名無名のひとびとを忘れることができないからであります。もしわたしが劇や演劇批評を一篇も書いていなかったら、またわたしの叙情詩が舞台で使われる話法の特質をとりいていなかったら、またおそらくは——これが意識的に考慮されたとは言えないでしょうが——わたしの叙情詩がある程度はひとつの運動の象徴となっていなかったら、たぶんイギリスの委員会はわたしの名前をあなたがたに提出しなかったことでしょう。わたしはスウェーデン王立アカデミーのかたがたに、わたしとともに働いてきたひとびとの労苦と勝利と困難をお話ししたいのです。

アイルランドの近代文学は、いや、イギリス・アイルランド戦争の下地をつくったあの思想運動の一切は、一八九一年にバーネルが失脚したときにはじまります。幻滅し憤激したアイルランドは議会政治に背をむけました。ひとつの事件の種がやどされました。そしてアイルランド民族は思うにこの事件の長い懐妊期間になやみはじめたのです。ハイド博士がゲール協会を創設しました。これはその後長い年月にわたって政治論議のかわりにゲール語の文法を研究し、政治集会のかわりにゲール語で歌をうたい物語を語る村の集まりを催すことになりました。一方わたしは英語で、つまり近代のアイルランドがものを考え実務を行なう言葉で、ひとつの運動をはじめました。わたしはいくつかの協会を創設し、そこで事務員や労働者などあらゆる階級の間人が、英語で書いたアイルランドの詩人や小説家や歴史家を、また英語に翻訳されているゲール語文学を研究できるようにしました。しかし

わが民族の大多数ははてしない政治演説を聞くことに慣れているのでほとんど読書をしません。それでわれわれはそもそものはじめから自分たちの劇場を持たねばならないと感じておりました。ダブリンの諸劇場はわれわれの劇場だと言えようなものではまったくなかった。それはイギリスの巡業劇団にやとわれた貸し席でしたし、われわれはアイルランドの劇と俳優を欲していたのです。われわれがこういう劇を考えるときにはロマンティックで詩的なものすべてのことを考えていました。なぜならわれわれが呼び覚ましたナショナリズムは——これまでも失意のときにあらゆる世代が呼び覚ましてきたナショナリズムと同様に——ロマンティックで詩的なものであったからです。しかし一八九六年にわたしがグレゴリー夫人に会うまでは——彼女はゴールウェイ地方の旧家の出で、ゴールウェイの二つの家、つまり彼女が生まれた家と彼女がといだ家のあいだで一生をすごしたひとです——こういう劇場は実現しませんでした。彼女のまわりには、ゲール語の統語法とチューダー王朝時代の英語の語彙を多分に保有している英語の一形態を用いて物語を語り聞かせる農民たちが住んでいました。しかし農民たちのその言葉がもつとも強力な劇の手法となることにわれわれが気づいたのはたいへん遅かった。実を言えば彼女が書きはじめるときは気がつかなかったものであります。わたしは方言を用いずに、イギリスの無韻詩で劇を書いていたのですが、彼女がわれわれの運動にひかれたのはその内容が田舎の物語の内容とほとんどちがわなかったからだろうと思います。二、三カ月前に暴動がありまして、彼女は一歩も退かずに自分の家をまもりましたが彼女が生まれた家の

1 一九一九年から二二二にかけてのアイルランド義勇軍とイギリス軍の武力衝突をさす。

2 チャールズ・スチュアート・バーネル(一八四六—一九一〇)。アイルランドの政治家でイギリスの下院議員。アイルランド自治運動の指導者であったが人妻との恋愛を告発されて失脚した。

3 ダグラス・ハイド(一八六〇—一九四九)。アイルランドの学者で『アイルランド文学史』等の著書がある。一九三八年から四五年までアイルランドの大統領をつとめた。

4 ゲール協会。一八九三年に設立。ゲール語(アイルランドヤスコットランドで用いられていたケルト系の言語)の復活を目的とする。

5 オーガスタ・グレゴリー(一八五九—一九三三)。劇作家。アイルランド文芸復興運動の有力な指導者のひとり。イニエツツの保護者でもある。

ほうは焼けおちました。アイルランドの大部分におなじような混乱が生じております。われわれの民族には一エーカーの土地をめぐるつまらぬ口論から恐ろしい残虐行為に走る性質があります。彼らはイギリスの特務警察との戦いで容赦のないあつかいを受けましたが、彼らのほうもまた容赦はしなかった。殺人には殺人で答えたのです。しかし、彼らの無知と暴力はもつとも高貴な美を思っておくこともできるのです。わたしはゴールウェイにちいさな古い塔を持っています。その頂にのぼるときほど遠からぬところに緑の野原が見えますが、かつてそこには地方の小地主の情婦で有名な田舎の美女が住んでいた蒼ぶき屋根の家が立っておりまして。わたしは彼女を覚えていた老人や老婆と話しました。このひとたちは今はみんな死んでしまいましたが、彼らはトロリアの城壁の上で老人たちがヘレネーのことを語るように彼女のことを語りました。男も女も変わりがなく彼女をたたえました。ある老婆は——このひとは近所の連中の思ひ出話によると若いころは不身持ちな女だったようですが——彼女のことを「あのひとを思うと体じゅうがふるえます」と言いました。近くの山に住むもうひとりの老婆は「日も月もあれほどきれいなひとを照らしたことはない。あのひとの肌はとても白いで青く見えるほどだった。あのひとの両頬にはふたつのちいさな赤らみがあった」と申しました。それから、市の日に彼女を見ようとして集まった群衆のことや、彼女を見るために「川をおよいで溺れ死んだ」男のことを話してくれるひとたちもいました。彼女をこれほど有名にしたのはゲール語の詩人ラフタリーが書いた一編の歌であります。田舎のひとたちは今でもこの歌をうたいます。わたしの若いころほどにはうたうひとも多くはありませんが。

おお光り輝く星よ、おお取り入れ時の太陽よ、

おお琥珀いろの髪よ、おおこの世のわが持ち分よ、

その体、その心、ともに美わしきは

メアリ・ハインズ、やさしくて気楽な女。

あたかも古代の世界がわれわれのまわりにひろがり、その自由な想像力を、おもしろい物語に対する歓びや男の力と女の美に対する歓びをあたえてくれるように思われました。またわれわれがやらねばならな

いはただ田舎が感じているとおりに町に考えさせることにつぎと思われました。しかしわれわれはやがて町は町の考えかたしできないことを知ったのです。

田舎にいる人は自分の暴力や自分の悲哀と直面します。ありふれた人生の悲劇と直面します。そしていくらかでも芸術的な才能があれば美しい情緒をもとめます。四季はつねに同じであらうと信じているから、その表現がどれほどともうもないものになっても一向に気にかけない。町ではあらゆる人間があなたにむかって殺到してくる。あなたはあなたの隣人を憎むのであってあなたじしんを憎むのではない。隣人の生活と自分の生活をみじめにしたくなければ、あるいはさらに何かの革命的な狂信におちいて隣人を殺したくなければ、誰かに現実と正義をおしえてもらわねばならないのです。あなたはしばらくはその教師を憎むでしょう。彼の著書や劇は醜悪だとか、ねらいがまちがっているとか、病的だとか、その種のことを言うでしょう。しかし結局は彼に同意しなければならぬのです。われわれは自分たちが世論と対立しているのを知ることになります。世論はわれわれの意志や俳優たちの意志とは逆に、つねによりリアリティックになることを強い、韻文のかわりに方言を、方言のかわりにふつうの話言葉を使えと迫ったのです。

わたしは劇場をひらく金があつまる見込みはなさそうだから、その希望はすてねばなるまいとグレゴリー夫人に話しておいたのですが、彼女は友人たちから金をあつめようと約束してくれました。彼女の近くに住んでいたミスタ・エドワード・マーティンが最初のいくつかの公演の費用をだしてくれました。最初の俳優たちはイギリスから来ましたが、やがてわれわれはアイルランドの素人俳優たちの小劇団といつしよにほんとうの仕事をはじめました。ある講演をしたときに、誰かが「どこで俳優たちを見つけたのですか？」とたずねるので、わたしは「どこか人のたくさんいる部屋へいってひとりひとりの名前を一枚づつ紙きれに書いていく。この紙たばを全部帽子のなかにいれてから籤びきで最初の十二名をとります」と言ったものです。今日にいたるまでわたしはよくこの予言を不思議に思うことがあります。と言いますのも、たぶん質問したひとを面くらわせまごつかせようとしてこう言ったはずなのに、ほとんどこれに近いことが実現したからです。ふ